

ベトナム水中考古学の現状と展望
ホイアン沖沈没船「予備調査」
VIETNAM UNDERWATER ARCHAEOLOGY
Preliminary Report on the Wreck Site Off Hoi An Coast

林田 憲三*
HAYASHIDA Kenzo

The possibility that a merchant ship may have sunken off the coast of Hoi An came to light among the relating institutions and scholars in Vietnam recently, because a large quantity of ceramics were retrieved from the bottom of the sea by fishermen of Hoi An and Da Nang. This is a report on the result of the preliminary underwater archaeological survey of shipwreck in Cu Lao Cham.

1. はじめに

今回調査の目的は、(1)ベトナム陶磁器が多量に引き上げられているホイアン沖海底について、沈没船の推定位置を探り、将来におけるホイアン沖海底の水中調査の可能性を評価すること、(2)海底文化財に対するベトナム側の現状とその対応を調査し、ベトナムにおける水中考古学の実践の可能性を探ることにあつた。

2. ホイアン沖沈没船の背景

ホイアン沖に交易船が沈没し、その沈没船の船体が遺存する可能性と海底調査の重要性がベトナムの関係機関や研究者の間で語られるようになったのは、ダナン市やホイアン市の漁師により、これまでに多量のベトナム陶磁器が海底

で発見されたからである。沈没船推定地点の海底から器種、製作年代、窯が同定できる多量のベトナム陶磁器が彼等の漁船で曳く網で不法に引き上げられ、これら海底出土品の文化財がホイアン市内の骨董屋、あるいは観光者相手の土産店の店頭に出現したため研究者にとって海底出土の文化財の調査・保護が緊急を要する課題となった。

今回の予備調査で市中に出回っている海底出土のベトナム陶磁器やホイアン史跡管理事務所が所蔵しているベトナム陶磁器（写真1）を観察すると、出土地点の海底環境を明瞭に陶磁器の表面に残しているのが認められる。それらがシルト質の海底から引き上げられていることが一目瞭然であり、陶磁器が海底で破損を免れ、

* 九州・沖縄水中考古学協会

Chairman, The Kyushu and Okinawa Society for Underwater Archaeology

現在までその完全な形を残させたことはこの底質であったからであろう。この底質の環境は沈没船が海底に定着した後、船底はかなり早い時期に海底下に沈む原因にもなる。そのうえ漁師の網から破壊を免れた船体の一部が海底下に残存していることも考えられる。船底材の直上には積み荷の陶磁器が沈んだ当時の状態のままで見られる可能性もある。更に引き上げられた陶磁器の一部には二次焼成を受けた可能性を示す痕跡があり、このことは交易船の沈没の原因となりえる資料であろう。

海底から無傷で引き上げられたベトナム陶磁器は現在でもホイアン市中に出回っている（写真2）。引き上げられたベトナム陶磁器で最も多い器種は椀類（写真3）である。更に引き上げられたベトナム陶磁器の良質のものはハノイ、ホーチミン、ダナンといった需要の多い大都市の市場へかなりの量が流出している事実が明るみになってきている。更に海外へと貴重なベトナムの海底出土の文化財が流出する可能性も出始めている状況が確認されつつあることは憂慮される。ホイアン沖海底出土のベトナム陶磁器が東南アジア沿岸部の航路を往来した交易船の積み荷であった可能性が高く、ベトナムと近隣諸国や東南アジア地域との対外交易、貿易陶磁器研究の解明の手がかりとして、沈没した交易船の海底調査の必要性が問題視され始めたのは当然の結果と思われる。

ベトナム陶磁器を海底から引き上げたことのあるホイアン市在住の漁師4人から海底遺物の引き上げ状況をホイアン史跡管理事務所でも担当者の立合のもとで、聞き取り調査を行なった。漁師からはベトナム陶磁器を引き上げている海域への案内の意志を確認し、確約をその場で取付けた。漁師から聞き取りを行なった結果、ホイアン沖海底よりベトナム陶磁器が引き上げられる推定地点はクウラオチャム島沖北の海域で



写真1 ホイアン沖海底引き上げベトナム陶磁器



写真2 土産店のショーケース内の陶磁器（中段）



写真3 最も多く引き上げられる椀類あり、この海域で以前より多量のベトナム陶磁器が漁師の網によって引き上げられていることが判明した。近世ベトナム陶磁器に混じって土産店の店頭へ並べられた海底引き上げのベトナム陶磁器は一目瞭然と判る（写真4）。しかし現在市中に出回っているこれらベトナム陶磁器の良質のものは殆ど見当らず、ホイアン史跡管理

事務所に僅かであるが欠損した盤、蓋付き鉢、水差し、皿、高杯等が市中から回収され、別館に保管されている。

3. クウラオチャム島沖沈没船 (図1)

ベトナム陶磁器が海底より引き上げられている地点はクウラオチャム島 (写真5) の北約15km 地点付近の海域 (東経108° 31'8"、北緯16° 7'4") であり、簡易測探器によれば水深約80mの海底¹⁾ であり、更にこの水深より深い可能性もある。この陶磁器が網に掛かって引き上げられる比較的広い範囲の海底に沈没船の存在が推定される。しかし、今回の予備調査では正確な沈没船の位置を確認することはできなかった。沈没船の確認、その位置を測定するにはサイドスキャン・ソナー、地層探知機、金属探知機、ROV (遠隔操作無人機)、GPS (全地球測位システム) 等の水中探知機や位置測定器の使用が必要となるからである。

ベトナム陶磁器が網に掛かって引き上げられる海域へはホイアン市から小舟を使ってトゥボン川の主流の水深がある場所まで行き、係留されている15トン程のにわか調査船として仕立てられた木造漁船に乗り換え、トゥボン川を30分かけて河口のクワダイへ向けて下った。ここで沿岸警備隊員を乗船させ、河口から外海へ出た。河口付近の南シナ海の海底はトゥボン川から運ばれてきた土砂の堆積が顕著である。また、東から強く吹いてくる貿易風の影響で河口付近に著しく発達した海岸砂丘が形成されており、砂丘の移動により海岸線が大きく変化している。更に砂嘴が河口より沖合に向かって成長しているのが見られる。また、河口付近は水深の浅い平坦な海底地形が続き、沖合い2km迄は水深が極端に浅い海域が存在する。水深10mの等深度線のすぐ東側沖合の海底には水深22mに達する掘り鉢状に窪んだ深さ約8m程の窪地



写真4 土産店の海底引き上げベトナム陶磁器 (中段中央付近の底部を見せた椀、下段両端の皿)

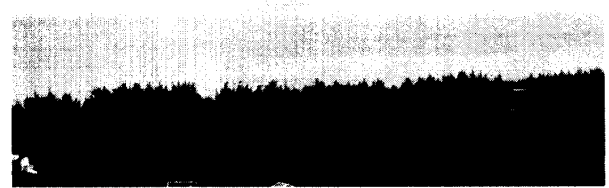


写真5 クウラオチャム島の風景 (西から)

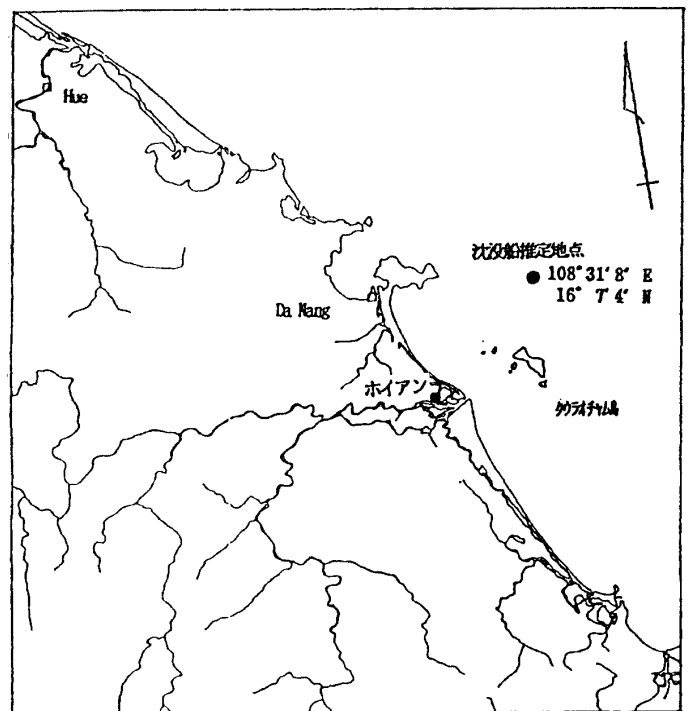


図1 沈没船推定地点位置図

(1.5×1km)があり、その南西側の縁には20世紀初頭に沈没したと伝えられている船体が海底に堆積した土砂により海底下に埋没していることが知られている。この沈没船はベトナム戦争当時、アメリカ軍によってこの地域の空撮が行なわれた際に、海面からマストやデッキの船体の一部が露出していたのが確認されていたとの説明もあるが、全ては不確かである。この沈没船の確認調査はベトナムの水中考古学の実践としての調査フィールドとなるには適切な候補地となることが期待されよう。

この海域より北東にクウラオチャム島を目指して船を進め、約2時間程でホンラ島とホンギアイ島の間を通り抜け、クウラオチャム島を右手に見ながら、船は更に北上を続け、約1時間程で沈没船の推定地点の海域へ到着した。クウラオチャム島付近の海域は北東から南東へと速い潮の流れがあり、水深も30mを超えている。しかし、ある所では水深60mにも達する海底も島の周囲には存在する。付近の海は日本で見る紺碧の色ではなく薄い緑色を呈している。海水の透明度は決して良好ではなく、恐らく水中では視界は5m以下であろうと思われる。調査船が目的の海域に入ると10隻程の漁船が彼等が設定した作業区域を慌ただしく動き回っている。海面には黒色のブイと竿に付けた赤色旗が確認できた。これらは漁船が網を海底に入れる地点の目印となる。調査船の近くでは全長3m程の鯨の突然の出現も確認できた。

陶磁器を海底から引き上げる方法は、まず漁船の軍団が二隻一組になり、長さ1kmに張った網の端をそれぞれの船に結び、網の下は重りをつけ、網が海底面に接するように両船の位置を狭め、ブイ地点で潮の流れに沿って網を入れると、網は海底で流れに向かって大きく膨らむ。膨らんだ網の中に海底の陶磁器が潮の強い流れで、網に転がるように入り込むといった方法で

ある。数キロに渡って網を流し、クウラオチャム島のその周辺の島の山立てが変わる地点で船は網を引き上げる。漁師の説明では網に掛かる陶磁器は最近減少しているということである。

沈没船推定地点の位置をハンドコンパス²⁾を用いて測位した。調査船が沈没船を推定できる範囲内にあることを前提として、調査船の船位を求めるために適当な物標を5点選び、更にならばその中から物標として測定誤差の大きい目標物を避け、3本の方位線を選び、それらの方位線の交点(三角形で囲まれる中心点)を地図上に記入した。物標とした3点はクウラオチャム島とその付近の小島から選んだ。ひとつはホンラ島で、方位は212°である。ふたつはクウラオチャム島の最高峰の山、ホンディエ山である。この山は物標として調査船から肉眼でも明瞭に認められる理想の目標である。方位は186°になる。最後の物標はクウラオチャム島の東端の岬で山の稜線が下がっていくと、海へ達する迄の比較的平坦な地形の先端部が目標になった。調査船からの方位は180°である。この方位測定で船位が決定される。この位置がおおよそその沈没船推定地点の位置となろう。それは地図上に二重丸で表記して印した。この位置はクウラオチャム島の北約15km、ダナン半島の東約20kmの海域にあたり、沿岸より沖合約30kmの位置である。

このように沈没船推定地点が沿岸部に比較的近い位置であることは交易船の航海方法として、「沿岸航法」を採用すれば交易船は安全に航行することができるということであった。「沿岸航法」は古代から船の海上航法であり、船の位置は陸上の特徴的な地形を航行する船から読むことで、その経験を積めば簡単に判断ができる。また沿岸部からの海賊行為も比較的避けることのできる距離でもある。交易船は右舷に陸地を視界に入れて進路を南に採り、インドシナ半島の南シナ海を南下していたことは当然

予想できる。沈没船推定地点の海底から現在でも引き上げられている多量のベトナム製の陶磁器は交易品としてベトナム国籍の船で運ばれる途中、クウラオチャム島沖で遭難に遭い、沈没した海難事故であったことを物語っているであろう。

4. ベトナム水中考古学の現状

ベトナム水中考古学の活動は学問として、その歴史が浅いため、水中遺跡、遺構や遺物を陸上と同様にベトナムの共有財産としての文化財として扱われる努力が払われているとは言いがたい。いまだ水中考古学がベトナム国家のドイ・モイ政策による政治・経済の民主化・近代化政策の基でも過小評価されていると考えられる。海底出土の文化財がクウラオチャム島沖の沈没船推定地点の海域で史跡管理事務所の担当者や沿岸警備隊員が乗り込んだ調査船を無視して、公然と盗掘されている現実はその事実を物語っている。国民の経済的な困窮の理由から海底出土の文化財が盗掘され、密売が黙認されることは我々にとっては許し難いことである。盗掘を中止するために何らかの経済的保障を盗掘者に行なうとすることは文化財の保護の思想からして、その行為は逆行するものであり、このような行為を公然と認めることはできない。国家による法律的な拘束を執行することで、海底出土の文化財の盗掘を中止することが望まれる。

しかし水中考古学の学問の対象となりえる遺構や遺物はベトナムの研究者によって僅かであるが調査が行なわれてきた。ホイアン市街地の川底から清朝時代の交易船のものと思われる木碇が出土している。更にトウボン川の流域ではホイアン史跡管理事務所が把握している川舟を含めて出土遺物の事例があることが今回の聞き取り調査でわかった。またクウラオチャム島沖の沈没船の海底調査が進められるとき、沈没船

の構造の復元に、トウボン川周辺や南シナ海で現在も使用されている木造漁船や荷物運搬船の船体構造は多いに利用できる。木造船の建造の工程や船体技術などは今後、ベトナム船舶の発達史に重要な考古資料を提供することになるであろう。

今回クウラオチャム島沖沈没船及びその積み荷のベトナム陶磁器（15世紀～16世紀）がベトナム水中考古学へ強烈な衝撃を与えたものであると信じる。海底出土の陶磁器は陸上の文化財と同様に厳格に扱わなくてはならない。しかし、文化財保護の意識が水中にまで及んでいない発展途上の国々では海底から引き上げられた陶磁器などはサルベージした当事者の取得物という意識が広く行き渡っているため、ベトナムでも然り、国内法で罰せられることなく領海内の海底文化財の盗掘が公然と行なわれている。ベトナム国家の水中文化財への認識のずれを大いに感じる。このような国家全体の水中文化財への姿勢が変わらないかぎり、今後ともベトナムの水中調査の健全的な発展は極めて難しいであろう。

ベトナム水中考古学のこのような現状を検証すると、水中文化財の保護・活用を促進させるためにもクウラオチャム島沖の沈没船とその積み荷のベトナム陶磁器の調査は行なうべきであろう。そのためにも今回の「予備調査」の結果を正しく評価して、将来の海底調査に備える探査や潜水調査方法など検討すべきである。今回、我々が行なったクウラオチャム島沖沈没船推定地点の「予備調査」は使用した機器から十分に満足できる結果を得ていない。この海域で詳しい予備調査を近い将来実施する必要があると考えられる。

そのためにクウラオチャム島沖の海底調査にもROVやこれに類似した水中テレビシステムを使用すれば海底の沈没船の遺存状態や陶磁器の

出土状況も確認できる。しかしこの海底調査に先立ち、この海域で、まず沈没船をサイドスキャン・ソナーや地層探査機などを使用して発見しなければならない。これらの探査は海底遺跡の全容解明に少なからず貢献するものであり、海底調査における水中環境のあらゆる困難さや諸条件に挑戦したり、それを克服するには水中考古学が科学の先端技術を積極的に取り込まなければ、陸上の考古学調査の精度は水中では得られない。この海底調査の探査方法はその技術提供とともに今後、ベトナム水中考古学の調査に大いに貢献できると信じる。

ベトナムが沈没船を含めて水中の遺構や遺物の調査に関心があり、これを海底文化財として、前向きに考えるつもりであれば、昭和女子大学国際文化研究所や九州・沖縄水中考古学協会がベトナム水中考古学に大きく貢献できる。ベトナムへの調査技術の協力や早急にして、解決可能な問題である。もしこのことをベトナム政府・関係機関に認めさせることができるならば、水中考古学の発展は計り知れない。ベトナムの陸上、水中に存在する歴史文化遺産がベトナム国民の共有財産であるという意識を高めるために、直ちに遅滞することなく日本とベトナムの文化的な相互関係を増進して行くべき時期にきている。ベトナム水中考古学がトウボン川の川底やホイアン市沖の南シナ海の海底、更にクウラオチャム島沖の沈没船の調査から始まるならば、この国の水中考古学の発展に歴史的な足跡を残す、第一歩となることを信じる。

5. 東南アジア地域における水中考古学の現状

東南アジア地域ではタイ、インドネシア、フィリピンの国々で既に水中考古学が実践されており、とくにタイでは1974年にタイ美術局(Fine Arts Department of Thailand)に水中考古学課が設立され、1979年にはオーストラリア、フ

リーマントルに所在する西オーストラリア海事博物館(Western Australian Maritime Museum)に所属するオーストラリア海事考古学研究所の技術協力を得て、シャム湾でこれまで10例にも上る海底遺跡の調査を行なっている。この分野でタイ国の海底遺跡への関心は確実に調査の実績をあげ、このことはシャム湾における沈没船や中国陶磁器(明、清朝時代)、タイ陶磁器(スコタイやスワンカロク地方の窯業)、更にシャム湾の奥まった東海域のコークラム(Ko Khram)海底遺跡ではベトナム陶磁器がタイ陶磁器に混じって出土していることが海底調査により明らかになっている。この海底遺跡からは船の部材も引き上げられていて、これらの部材はC14により3種類の年代(14世紀後半、16世紀前半、17世紀後半)が与えられている。シャム湾からベトナム陶磁器が出土したことはタイとベトナム両国の間に海上の道を利用した交易船による文物交流が存在したことが明らかになっている。

タイ水中考古学のシャム湾海底での実践が今日、東南アジアでの指導的役割を果たしているが、しかし1974年以前には海底文化財が盗掘され密売が横行していた状況がタイ国にも存在していた。しかし、海底文化財の盗掘をタイ政府が禁止して、シャム湾の海底調査の体制を急遽整備する改善策を採り、国家主導の水中考古学研究所を設立したことは今日の日本の水中考古学の環境よりも理想的といえる。国家が海底文化財に対して、その遺跡を保護し、調査を行なう公的な研究機関を設立して、現実に対応したことは、タイ国の水中考古学への真摯な姿勢が大いに評価できよう。

このことはベトナム沿岸の南シナ海の海底遺跡の分布調査及び海底調査の不在が東南アジア地域で水中調査の実践からベトナムだけが真空地帯を作り出しているといえる。ベトナム水中

考古学がこのような状況をいつまでも続けることは東南アジア地域で果たす役割の大きな可能性を持っていることを自ら否定しているといえるであろう。ベトナム史において水中考古学が自ら解明できる考古資料がベトナムの河川や南シナ海の海底に豊富にある。例えばサーフィン文化やチャンパ文化の解明には海との関わりなしには理解は深まらないであろう。クウラオチャム島沖の海底遺物は水中考古学の本来の手続きを採らずに偶然に海底から発見された文化財ではあるが、これらが発見された地点や遺物を更に詳しく調査すれば海底の文化財の基礎的資料となり得る。海底からベトナム陶磁器を含むその他の出土遺物をベトナムや東南アジア地域の海底や陸上で発見された遺物と比較すれば、それぞれの地点や地域を結ぶ船による人物交流の完成された海上の道が復元できる。この海上の道を東南アジア全域で通用する交易品や情報などが運ばれたであろう。船は短時間に長距離を多くの人や荷物を運ぶことのできた、古代から近代までの重要な移動手段であったといえる。このことからしても南シナ海は水中考古学の宝庫の海域のひとつになれるであろう。この海域は水中考古学が日本や中国を含む東アジアの歴史の解明にも貢献できると確信できる海域である。また、ベトナムと中国、ベトナムとフィリピン、ベトナムとカンボジア、インドネシアとタイとに横たわる海域での水中考古学調査の増加はベトナムや周辺地域の考古学調査に計り知れない情報を提供するであろう。

6. ベトナム水中考古学の実践と展望

ベトナム水中考古学が専門の学問分野として、「人類学」かあるいは「歴史学」としての「考古学」のどちらの専門分野を選んで実践されるのか、今後のベトナムが世界各国の国際協力によって水中考古学の調査や調査技術の援助

を受けるとき、援助した国の水中考古学の概念、学問の姿勢に強く影響されていくと予想される。ベトナム水中考古学が米国や欧州からの影響力を強く受け入れるならば、その地域で実践されている「人類学」としての水中考古学となるであろう。しかし我々の水中考古学は「歴史学」としての「考古学」であり、その学問領域の枠組の中で実践している。水中考古学は沈没船の調査だけではなく、水中に没した遺跡や遺構を考古学の方法・理論を応用して実践している学問であるが、水中環境に適応させる新しい考古学理論をベトナムが新しい学問として実践するにあたり、これから努力することが望まれる。ベトナム水中考古学が水中調査を実践する前にまず、その学問の立場を明確にする必要がある。

ベトナムでは未だ水中文化財の分布調査が行なわれていないために、多くの水中遺跡の可能性のある水底が盗掘で破壊されている。詳細な分布調査をベトナム全土に渡って行ない、文化財が確認された水底は埋蔵文化財として周知させなければならない。水中の文化財の保護や活用は陸上における文化財と同等に国家的関心による保護や活用の適用を受けなければならない。そのためには国は水中遺跡や遺物を保護する立場から水中文化財保護法といったものを早急につくる必要があるであろう。それと平行して、ベトナム考古学者には水中遺跡の確認調査や本調査に適切に対応できる潜水技術を緊急に習得させ、水中考古学者を養成する必要があるであろう。潜水技術などは考古学者が一人前の学者になるために、費やす年月に比べれば、1カ月もあれば十分に習得可能である。日本の水中考古学はベトナム考古学者に潜水技術の習得を援助できると確信できる。

ベトナムでも最近、海岸部のリゾート開発が外国資本の援助ですすめられている。海岸部の

開発が大規模になるにつれて、海底文化財の存在を無視し、破壊を繰り返すことも予想される。人間の共通財産である海底文化財を水中考古学調査によって、記録され、更に保存されるようになれば、ベトナム水中考古学は国際的にも歴史遺産の保護に高い評価が与えられるであろう。

註

1) この水深は「ポータブル測探器P S-7」による測定である。この測探器の測定可能範囲は最大水深79m迄である。調査地点での測定は調査船の舷側より測探器の先端部を海面下に沈め海底に向けて超音波を発進させる方法で行なった。測探器に付いている液

晶板に距離の表示がなく、誤動作を避けるために数回にわたり測探を行なったが、水深は表示されなかった。その結果海底までの水深がこの測探器の測定許容範囲外であったことになり、このことから沈没船推定地点の水深は少なくとも79m以上あることになる。

2) ベトナム入国に際して政府の許可書無しに持ち込めると判断し、簡易な測定器を用いた。ハンドコンパスは(SAURA HB-65G)である。更に今回の予備調査で準備した潜水器具は(タンク、コンプレッサーを除く)ベトナムの入国関税で「税関申請書」に持ち込む機材として申告した。